

# 筑後市内遺跡群Ⅹ

福岡県筑後市大字富重所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第79集

2007

筑後市教育委員会

ちくご し ない い せきぐん  
筑後市内遺跡群Ⅹ

2007

筑後市教育委員会

# 序

この報告書は、市道拡幅に伴って平成 18 年度に行なった、発掘調査の成果をまとめたものです。当遺跡一帯は、若菜遺跡群として広範囲に埋蔵文化財の包蔵が認められる地域で、全体の解明が期待されるところでもあります。また、同じ低丘陵の西側に展開する高江遺跡との空白地帯の解明も課題となっています。

今回の発掘調査では、中世の遺構の存在も明らかになり、新しい地域史の一面を垣間見ることができました。何分にも調査範囲が限定されていて、遺跡の性格等を理解することはできませんでしたが、本書が地域の歴史解明や、文化財愛護に活用されれば、望外の喜びです。

最後になりましたが、現地での発掘調査から本書の刊行に到るまで、御助力御協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

筑後市教育委員会  
教育長 城戸一男

# 例 言

1. 本書は、筑後市教育委員会が平成 18 年度に実施した富重東原遺跡第 1 次調査および富重北屋敷遺跡第 1 次調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は第 I 章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会で収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳が作成した。遺物実測図作成と図版浄書は、財団法人元興寺文化財研究所に委託し、丸山裕見子、猿渡式子、横井理絵、仲文恵が行なったが、一部の図版は永見が浄書した。
4. 本書に使用した写真は、遺構写真および遺物写真を永見が撮影したが、富重東原遺跡第 1 次調査の全体写真は(有)空中写真企画に委託した。
5. 本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた遺構仮番号を生かし、頭に調査回数、遺構種別を加えた。第 1 次調査の S-1 が溝である場合、1SD01 となる。
6. 本書に用いた方位はすべて G.N. を、水準は T.P. を基準としていて、座標は第 II 座標系に属している。また、座標値および緯度は世界測地系（測地 2000）によった。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から 45° 東にあたる場合、N - 45° - E と表記した。
7. 本書の執筆および編集は永見が行なった。

# 目 次

第 I 章 はじめに	1
第 II 章 位置と環境	3
第 III 章 調査成果	5
1. 富重東原遺跡（第 1 次調査）	5
2. 富重北屋敷遺跡（第 1 次調査）	13

# 第I章 はじめに

本書は、平成18年度に実施した富重東原遺跡第1次調査および富重北屋敷遺跡第1次調査の成果を収録したものである。これらの調査は、市道改良（拡幅）工事によって消滅する部分について記録保存の措置をとったものである。

平成18年度に、筑後市役所建設部道路課から筑後市教育委員会に対して、試掘・確認調査の依頼がなされた。調査の結果遺構が確認され、道路は永久構築物であるので工事着工前に記録保存のための本発掘調査が必要な旨、通知した。

しかしながら、本調査は平成17年度中に取りかかることができない状況であったので、平成18年度に調査することで、協議が整った。現地での調査は、平成18年8月19日から調査に着手した。前半は秋雨にたたられたものの中盤以降は天候にも恵まれ、10月16日までで現地の調査を完了した。これが富重東原遺跡第1次調査である。

これが富重東原遺跡第1次調査である。試掘・確認調査の時点では、代表所在地が筑後市大字久富字丁長であったため、埋蔵文化財関係の諸手続きは久富丁長遺跡の名称で行っている。調査着手後に当該地が筑後市大字富重字東原であることが判明したが、調査時点では遺跡名の名称変更は行わず、報告書刊行の際に本来の遺跡名に変更することとした。混乱のないように留意されたい。

一方、平成18年度に入り、筑後市役所建設部道路課から筑後市教育委員会に対して、富重東原遺跡第1次調査地点から西に約150mの地点で、試掘・確認調査の依頼がなされた。調査の結果、遺構が

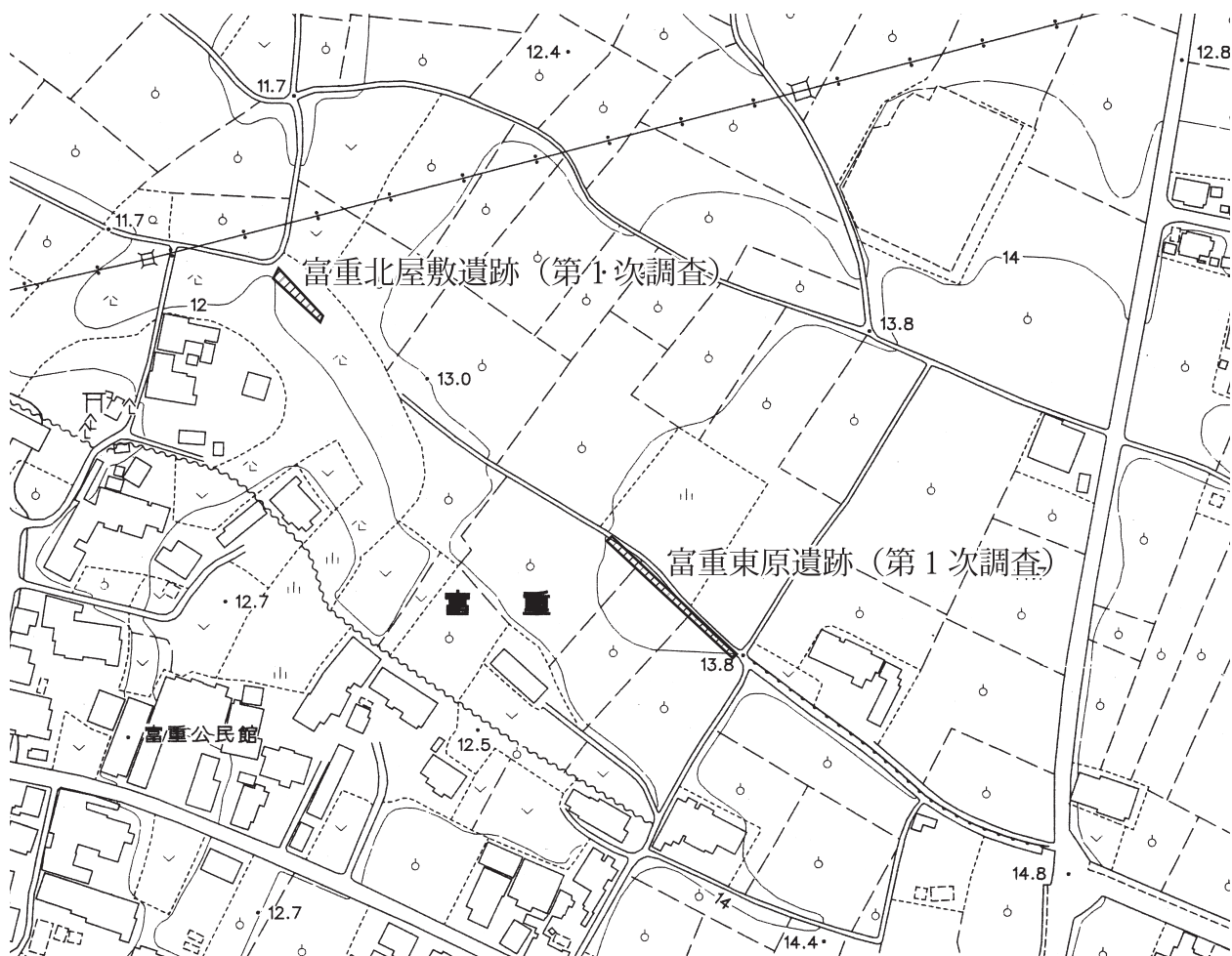


Fig.1 調査地点位置関係図

確認され、富重東原遺跡第1次調査と同様に記録保存のための本発掘調査が必要な旨通知した。富重東原遺跡第1次調査の調査完了後に調査に着手することで建設部道路課と合意し、調査を実施した。現地の調査は平成18年10月16日に着手し、11月15日に完了した。これが、富重北屋敷遺跡第1次調査である。

出土遺物の整理と報告書刊行作業は、現地の調査完了後に順次着手し、平成19年3月31日までの期間で実施した。作業のうち、遺物洗浄、遺物接合、遺物実測、遺物復元、図版浄書の各作業は財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

また、調査体制は以下のとおりであった。

総括	筑後市教育委員会	教育長	城戸 一男
		教育部長	平野 正道
庶務		社会教育課長	田中 僚一
		文化スポーツ係長	北島 鈴美
		文化スポーツ係	小林 勇作（文化財専門職）
事前審査担当		文化スポーツ係	上村 英士（ 々 ）
調査担当		文化スポーツ係	永見 秀徳（ 々 ）

なお、現地での調査から報告書刊行に到るまで、以下の方の御指導御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

水野正好（前：奈良大学）、佐田茂（佐賀大学）、岸本圭・大庭孝夫・今井涼子（福岡県教育庁）、大塚恵治（八女市教育委員会）、片岡宏二（小郡市教育委員会）、狭川真一（元興寺文化財研究所）、近藤武敏（筑後市立病院）、中塚達也・富安英司・松延美和（以上、筑後市役所）

## 第Ⅱ章 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の南西部にあたる。市域をJR鹿兒島線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。



Fig.2 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

まず旧石器時代であるが、蔵数坂口遺跡や鶴田東大坪遺跡等で遺物が出土している。しかしながら、遺構の発見には到っていないため、当時の様相はほとんど不明である。つづく縄文時代であるが、筑後市内では縄文時代の遺跡は市の南部域に集中することが判っている。ただし、例外的に落し穴は全域に分布する。特に鶴田岸添遺跡や久恵内次郎遺跡では、多数の落し穴を検出している。また、津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久恵中野遺跡等では、早期のものと思われる石組炉も発見されている。さらに、尾島集落の北側には縄文時代の集落として著名な裏山遺跡がある。

次の弥生時代であるが、中期初頭までの集落は、縄文時代と同様に市域の南半部に偏って分布する傾向が強い。中期も後半に入ると、北部の丘陵上や南部の低平地へも展開して遺跡数は爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、常用長田遺跡や常用日田行遺跡等が著名で、前期の溜井も津島九反坪遺跡で確認されている。中期後半以降の集落は、蔵数森ノ木遺跡が特に著名である。また、低平地への展開例では津島皿ヶ町遺跡がある。また、鶴田岸添遺跡では火災で消失した竪穴住居も確認されている。

古墳時代は、市北部の石人山古墳、欠塚古墳、瑞王寺古墳が良く知られている。集落遺跡では、弥生時代から継続している蔵数森ノ木遺跡や久富鳥居遺跡、鶴田西畑遺跡、津島南佛生遺跡等がある。集落の基本的な立地は、弥生時代後半のそれを踏襲する。

筑後市域は、古代には交通の要衝として認知されていたようで、古代官道の西海道が南北に縦断する。発掘調査でも、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡、山ノ井南野遺跡等で確認された。延喜式にある葛野駅は筑后市附近にあったと考えられていて、最有力候補地は羽犬塚中学校附近である。羽犬塚中道遺跡では「□郡符葛□」と墨書された土師器も出土している。また、若菜森坊遺跡では竪穴式住居によって構成される大規模な集落が確認されている。

中世には、館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には社寺領を中心に荘園が発達し、その支配を基盤にした社会が形成される。これは当地域の特徴のひとつといえよう。具体的には、市域の北半部から隣町の広川町にかけて熊野領の広川荘が成立し、その中心は筑後市の熊野であった。また市の南東部には郡名荘である上妻荘があり、南西部には安楽寺領の水田荘・下妻荘が成立する。水田荘の中心には老松宮（のちに水田天満宮）が置かれ、それを中心に水田六院が栄えた。

これら荘園の境界附近には、屋敷や坊といった小字名が残り、対峙する各荘園が配した屋敷地であるとみることができる。長崎坊田遺跡や、若菜森坊遺跡、井田西中野遺跡などがこれにあたる。

近世には、在郷町がつくられ、特に羽犬塚町は宿町とも呼ばれ栄えた。有馬藩の三宿に数えられ、御茶屋が置かれるなど、発展を遂げた。また、農村集落の事例として四ヶ所古四ヶ所遺跡もある。

転じて、富重東原遺跡・富重北屋敷遺跡の周辺を見てみたい。富重東原遺跡は、先述した若菜森坊遺跡と同様に、若菜遺跡群に包含され、同遺跡群の北西端に位置する。この遺跡群の中心は、言うまでもなく若菜森坊遺跡であるが、富重東原遺跡周辺では、弥生時代の辻遺跡も知られている。

富重北屋敷遺跡から西に約500mには高江遺跡も展開し、若菜遺跡群と高江遺跡は同じ低丘陵上に展開する遺跡といえる。そうした意味で、これら二つの遺跡の間を埋める今回の調査は興味深いものがある。

#### 参考文献

『筑后市史』 筑后市史編纂委員会 1998



## 第Ⅲ章 調査成果

### 1. 富重東原遺跡（第1次調査）

富重東原遺跡（第1次調査）は市道若菜北原高江南平線改良工事（拡幅）に伴って、記録保存の措置を講じたものである。第1章にも記したとおり、調査時点では久富丁長遺跡として扱ったが、所在地が筑後市大字富重字東原であることが判明したため、報告に際して、富重東原遺跡と改めることにした。

調査区は、道路改良に伴う発掘調査の例に漏れず細長い調査区設定を余儀なくされた。また、廃土置き場の都合上、調査区を反転して調査を実施せざるを得なかった。全景写真は、デジタルモザイク法で



Fig.3 調査地点位置図 (1/2,500)

前半時撮影のものとは後半時撮影のものを合成する選択肢もあったが、一枚の写真の中に極めて細い線状の調査区が写り込むことになるため断念し、前半と後半を別々に掲載した。

調査対象面積は、約 550 m<sup>2</sup>で、調査は永見が担当した。

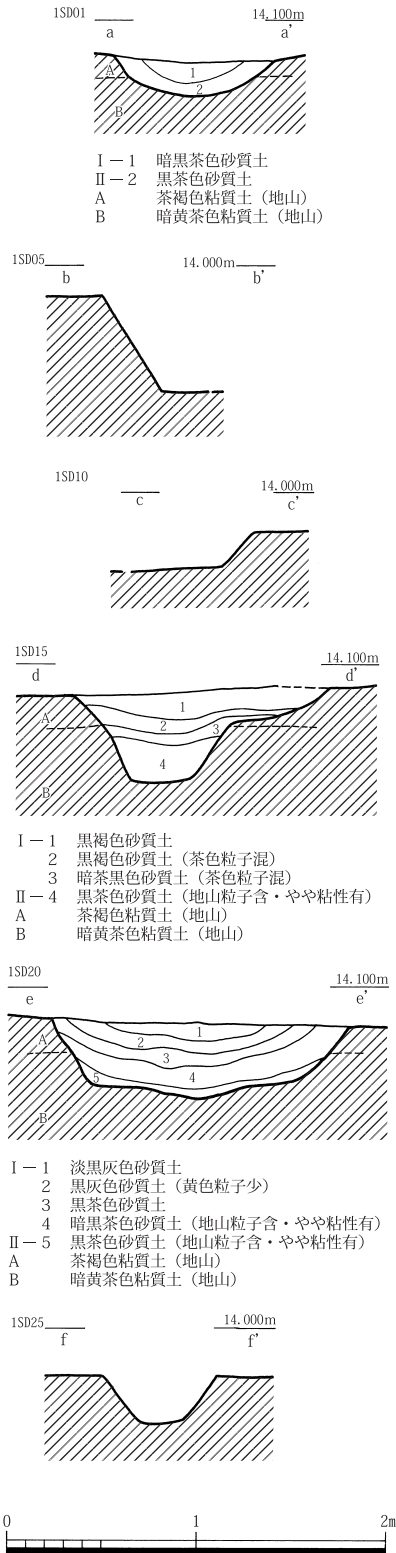


Fig.5 溝状遺構実測図 (1/40)

### 遺構

遺構を概観すれば、中世のものと近世のものに分かれるようである。報告では敢えて時代別には報告せず、遺構種別・遺構番号順での報告を基本とした。ご了解願いたい。

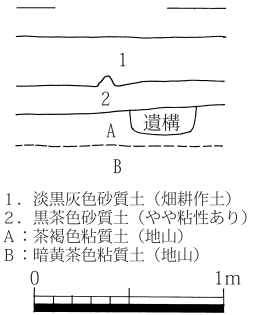


Fig.4 基本層序 (1/40)

### 溝状遺構

6条を検出した。うち4条は2条ずつが一連の遺構となっている。いずれも調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。

#### 1SD01 (Fig.5、Pla.3)

調査区東部を北西-南東に走っている。南側ではN-53°-Wの方位となる。幅は0.8m深さは0.3mを測る。出土遺物は、土師器(皿・片)・瓦器(播鉢)がある。

#### 1SD05 (Fig.5、Pla.3)

調査区東部の北端を北西-南東に走っている。南側ではN-47°-Wの方位となる。深さは0.5mを測るが北半分が調査区外のため幅は不明である。出土遺物は、土師器(さな?・片)・磁器(盃)がある。

#### 1SD10 (Fig.5、Pla.2)

1SD01の延長かと思われる。南側ではN-55°-Wの方位となる。深さは0.2mを測るが南側が調査区外のため幅は不明である。出土遺物は、土師器(片)・磁器(片)がある。

#### 1SD15 (Fig.5、Pla.4)

調査区中央部を北西-南東に走っている。方位は、調査区東側ではN-19°-Wであるが、調査区西側ではN-46°-Wとなる。幅は0.6~1.0m深さは0.5mを測る。出土遺物は、須恵器(甕)・土師器(皿・片)・黒曜石(鏃)・すり石がある。

#### 1SD20 (Fig.5、Pla.5)

調査区西部をほぼ北西-南東に走っている。方位はN-52°-Wの方位となる。幅は1.5m深さは0.4mを測る。出土遺物は、土師器(皿)・瓦器(椀)・磁器(竜碗・染付皿?)・片岩(打製石斧)がある。

#### 1SD25 (Fig.5)

調査区南端で北東-南西に走っている。方位はN-52°-Wの方位となる。幅は0.6m深さは0.2mを測る。出土遺物は、認められなかった。

### 土坑

1基を確認したが、不明遺構として報告するべきかも知れな

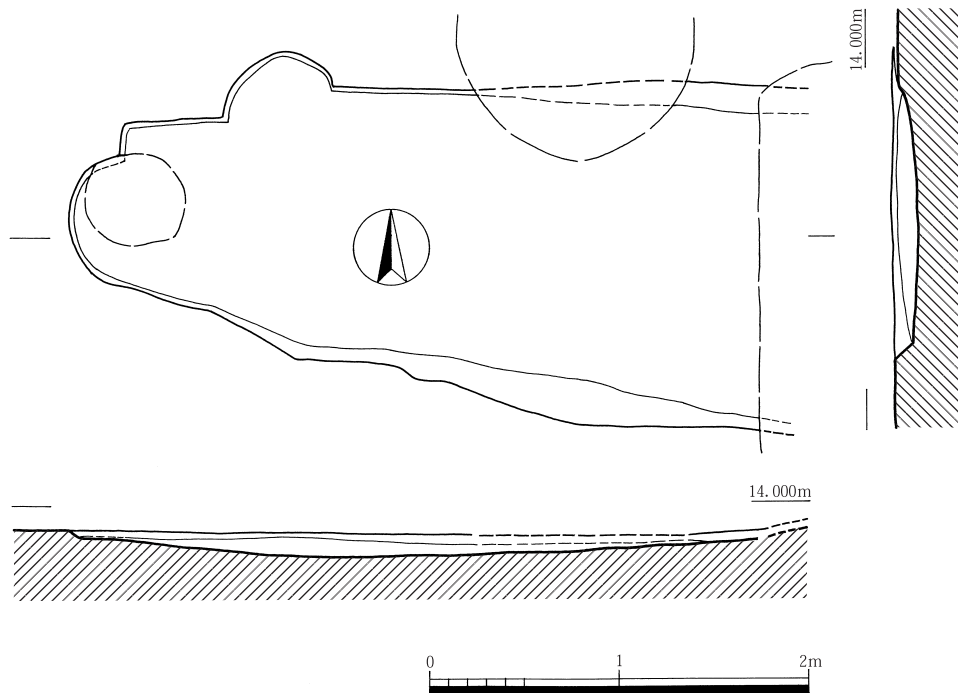


Fig.6 1SK02 実測図 (1/60)

い。ここでは土坑として扱うので御了解いただきたい。

#### 1SK02 (Fig.6)

調査区の南に位置している。南北 1.8 m 深さ 0.1 m を測るが、東西方向の規模は不明である。主軸の方位は、N - 42° - E である。出土遺物は、土師器 (皿)・青磁 (竜碗 II - b)・石がある。

#### 出土遺物

今回の調査では、パンコンテナ 1 箱分の遺物が出土した。以下、遺構ごとに報告したい。なお、遺物の詳細については出土遺物観察表によっていて、本文には観察表で表現しきれない部分や、特徴的な部分を中心に記載した。したがって、本文中では詳しく触れない遺物もあるので注意されたい。また、本書では瓦質土器、土師質土器の名称は使用していない。それぞれ、瓦器および土師器と表記した。

#### 1SD01 出土遺物 (Fig.7、Pla.8)

1 は、土師器の皿である。全体の 1/2 程が残存している。底部には回転糸切の痕跡を有し、口径 10.0 cm 底径 7.8 cm 器高 1.5 cm である。胎土には砂粒と石英を含有し、焼成はやや不良である。2 は瓦器の播鉢で、I 層からの出土である。体部の細片で、外面には刷毛調整とナデが施され、内面には深くしっかりした摺り目が施されている。焼成はやや良で、胎土に砂粒と石英を含有する。

#### 1SD05 出土遺物 (Fig.8、Pla.8)

1 と 2 は、白磁の盃で同一個体の可能性がある。1 は口縁部の資料で、口径は 8.8 cm を測る。残存部分は、全面に施釉している。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は、素地・釉薬ともに乳白色を呈する。2 は底部の資料で、高台径は 1.8 cm である。残存部分の全面に施釉する。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は、素地・釉薬ともに乳白色を呈する。内底見込には、おしべ状の施文が認められる。3 は土師器の「さな」ではないかと思しき資料である。細片資料で、長さ 4.5 cm 幅 3.6 cm 厚み 1.6 cm を測る。色調は、暗灰茶色を呈し、焼成は良好である。胎土もよく精選されている。

#### 1SD15 出土遺物 (Fig.9、Pla.8)

1 と 2 は半裁時出土遺物である。1 は須恵器の甕である。体部細片の資料で、外面には平行叩き、内面には同心円文叩きが認められる。胎土は 3 mm 大の白色砂粒と石英を含有するが、密である。焼成はやや良で、色調は内外面ともに淡茶灰色である。2 は、黒曜石製の打製石鏃である。長さ 1.9 cm 幅 1.7

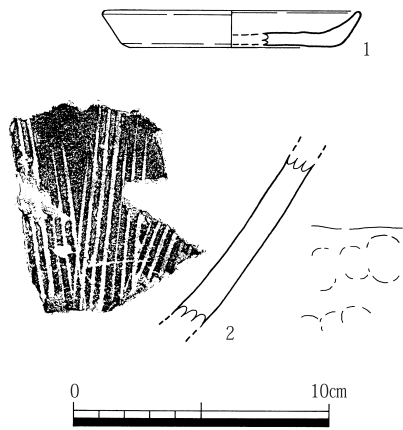


Fig.7 1SD01 出土遺物実測図 (1/3)

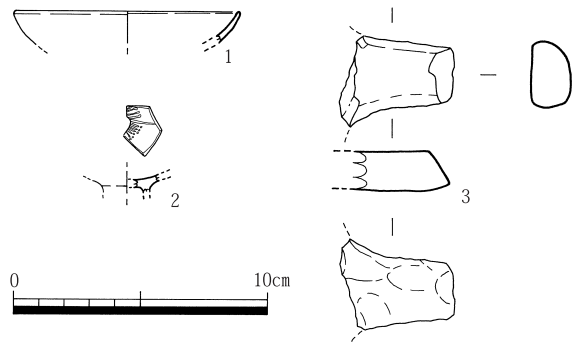


Fig.8 1SD05 出土遺物実測図 (1/3)

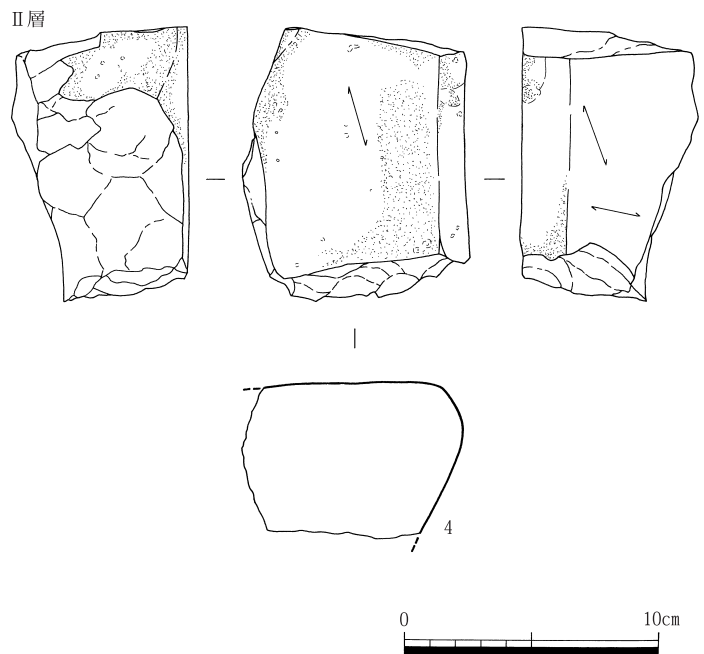
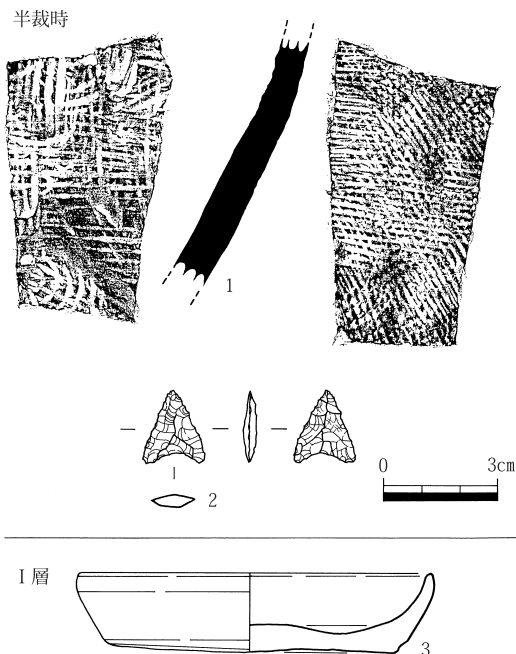


Fig.9 1SK15 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

cm厚み0.4cmで、完形品である。表面は風化が進んでいる。石材は嬉野の椎葉川産の黒曜石と推察される。

3は、I層出土の土師器坏である。全体の1/2程が残存していて、口径13.9cm底径11.4cm器高3.2cmを測る。口縁部と体部外面は横ナデを施し、体部内面と内底部はナデを施している。底部には回転糸切の痕跡が認められる。また、体部外面の下端には、糸切り時の粘土のはみ出しが認められ、粗雑な印象を受ける。

4は、II層から出土した摺り石の細片である。安山岩と思われ、被熱痕跡が認められる。長さ10.8cm幅8.8cm厚み6.0cmが残存している。

1SD20 出土遺物 (Fig.9、Pla.8)

1～7は半裁時出土遺物である。1～3は土師器の坏である。1は口縁部の一部が欠損するものの、概ね完形と呼べる資料で、口径13.2cm底径9.8cm器高2.7cmを測る。口縁部と体部は内外面ともに横ナデ調整で、内底面はナデを施している。外底面には回転糸切の痕跡が残り、板状の圧痕も認められる。胎土は雲母粒子と微砂粒を含むものの、概ね精良である。2は全体の1/2程が残存する資料で、口径

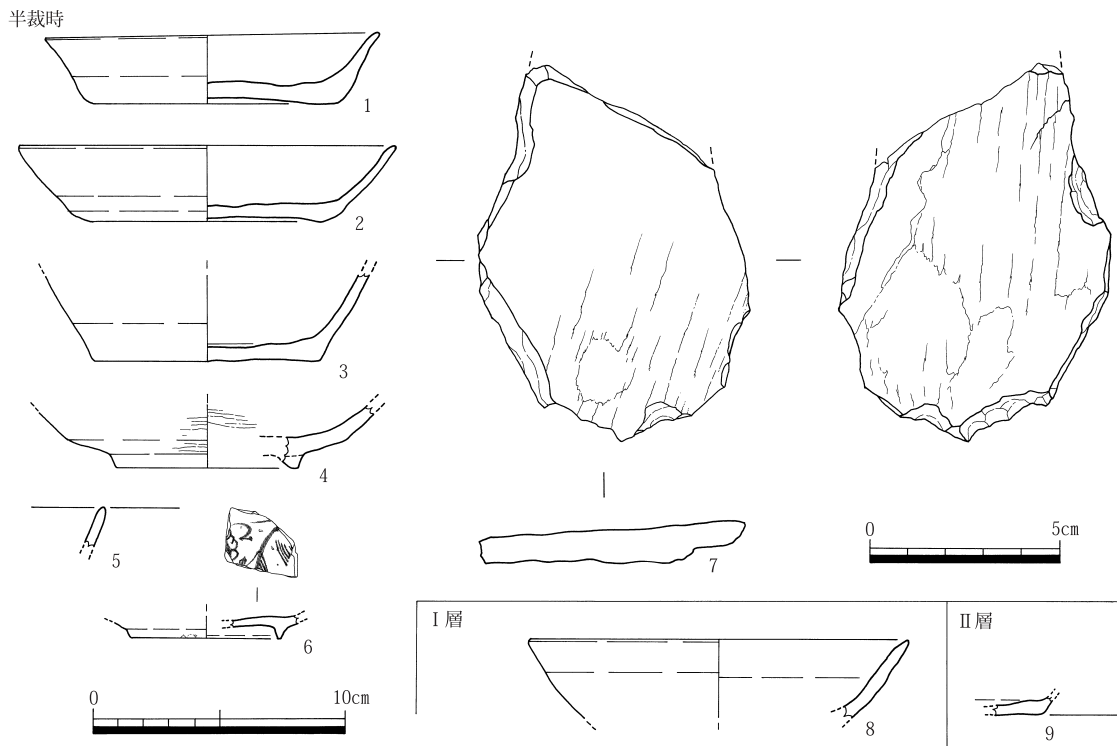


Fig.10 1SD20 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

14.8 cm底径 9.0 cm器高 3.0 cmを測る。外底面を除いて横ナデを施し、外底面には回転糸切の痕跡を残す。3は底部の資料で、底径 9.0 cmを測る。体部は横ナデ、内底面には横ナデとナデを施す。外底面には回転糸切の痕跡が残り、板状の圧痕も認められる。焼成は、やや不良である。4は瓦器の椀である。底部が 1/4 程残存し、高台径は 7.2 cmを測る。体部は篋磨きを施すが、内底面はナデ調整である。胎土は精良で、焼成はやや良である。5は青磁の碗である。口縁部細片で、口縁部には全面施釉される。胎土は精良で、焼成も良好である。6は染付の皿と思しき資料で、高台径は 6.0 cmを測る。残存部分は全面施釉されるが、畳付は釉薬を掻き取っている。内底見込には呉須で施文されるが、支え針痕と思しき痕跡が認められる。7は、片岩製の扁平打製石斧と思しき資料である。刃部が撥方に開く類型である。

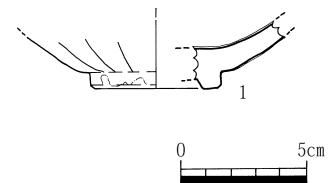


Fig.11 1SD20 出土遺物実測図 (1/3)

8は、I層から出土した土師器の坏で、口縁部の 1/4 が残存している。口縁部と体部は横ナデを施している。9はII層から出土した土師器の皿で、底部の細片である。体部外面の調整は不明であるが、体部内面は横ナデ、内底面にはナデを施している。外底面には回転糸切の痕跡が認められる。

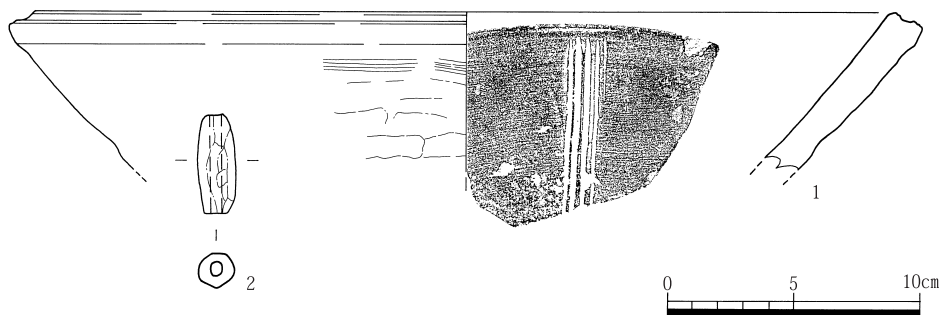


Fig.12 攪乱出土遺物実測図 (1/3)

富重東原遺跡（第1次調査）

Fig. No.	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	R-No.
7	1SD01		土師	皿	10.0	7.8	1.5	1/2	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	回転糸切	淡白茶色	蜜	2mm大の砂粒・石英	やや不良	開く		1
7	1SD01	I層	瓦器	襦鉢				体部細片		刷毛ナデ	ナデ摺り目			外：暗茶灰色 内：淡茶灰色	蜜	2mm大の砂粒・石英・角閃石	やや良			1
8	1SD05		白磁	盃	8.8			口縁部1/8	施軸					素地：乳白色 釉薬：乳白色	精良		良好			3
8	1SD05		白磁	盃	4.8			高台部1/4			施軸	施軸		素地：乳白色 釉薬：乳白色	精良		良好			2
9	1SD15		須恵	甕				体部細片		平行叩き	同心円叩き			淡茶灰色	蜜	3mm大の白色砂粒・石英	やや良			1
9	1SD15	I層	土師	杯	13.9	11.4	3.2	1/2	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	回転糸切	外：淡橙茶色 内：淡灰黄色	蜜	2mm大の砂粒・石英・角閃石・赤色砂粒	やや良	内湾	体外部下端に糸切時の粘土のはみ出し有	1
10	1SD20		土師	杯	13.2	9.8	2.7	口縁部一部欠損	横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	回転糸切 板状圧痕	外：明黄茶色 内：明灰茶色	精良	雲母・微砂粒	やや良	外反		3
10	1SD20		土師	杯	14.8	9.0	3.0	1/2	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切	明橙色	精良	0.5mm大の砂粒	やや良	僅かに外反		1
10	1SD20		土師	杯		9.0	3.4	底部完存		横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転糸切 板状圧痕	外：淡黄白色 内：淡黄茶色	精良	微砂粒少・赤色粒子少	やや不良			4
10	1SD20		瓦器	碗	7.2			底部1/4		磨磨き	磨磨き	横ナデ	ナデ	外：明灰白色 内：明黄茶色	精良		やや良			7
10	1SD20		青磁	碗				細片	施軸					素地：暗茶色 釉薬：暗緑色	精良		良好	開く		2
10	1SD20		染付	皿?	6.0			底部1/8				施軸 施文	施軸	素地：灰白色 釉薬：青灰色	精良	黒色粒子	良好		量付は軸を掻き取る 内底見込みに斜支え痕?	5
10	1SD20	I層	土師	杯	14.8			口縁部1/4	横ナデ	横ナデ	横ナデ			外：淡黄茶色 内：黄茶褐色	精良	赤色粒子微量	やや良	僅かに外反		1
10	1SD20	II層	土師	皿				底部細片		不明	横ナデ	ナデ	回転糸切	外：明黄茶色 内：淡橙色	精良	赤色粒子少量	やや良			1
11	1SK02		青磁	碗	4.8			底部1/2		施軸	施軸	施軸	露胎	素地：淡灰茶色 釉薬：淡茶緑色	精良		良好			1
12	攪乱		土師	練鉢	34.0			口縁部1/8	横ナデ	ナデ	ナデ 摺り目			明黄茶色	精良	0.5mm大の砂粒微量	やや良	外方に開く 端部に面		2

Tab.1 出土遺物観察表（土器）

Fig. No.	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	R-No.
8	1SD05		土師		さな	4.5	3.6	1.6	23.8	細片		1
9	1SD15		黒曜石	推葉川	巖	1.9	1.7	0.4	1.0	完形		2
9	1SD15	II層	安山岩?		摺り石	10.8	8.8	6.0	1,039.0	細片	破熟痕跡有	1
10	1SD20		片岩		打製石斧	89.9	7.0	0.9	91.0	1/2		6
12	攪乱		土師		土罐	3.9	1.5	1.4	9.1	完形		1

Tab.2 出土遺物観察表（土器以外）

1SK02 出土遺物 (Fig.11、Pla.8)

1は、青磁の碗である。竜泉窯系と思われる。口縁部は僅かに外反する形状である。

攪乱出土遺物 (Fig.12、Pla.8)

1は、土師器の練り鉢である。口縁部の1/4程が残存する。内面には疎らに摺り目が施される。

小結

今回の調査は、幅約3mの細長い調査区設定ではあったが、いくつかの新知見をもたらした。まず、調査区の東側に位置する1SD01と1SD10であるが、途中の切れ目が興味深い。というのも、調査区の南側はホノケを「テラノウシロ」と呼んでいて、そこに寺院もしくは社寺荘園関連施設の存在が推察されるのである。したがって、1SD01と1SD10は施設の北限の区画溝であり、その切れ目は出入口となる可能性を指摘できる。

次に、1SD05であるが、これは現在の大字久富と大字富重の境界に一致する。したがって、大字境の溝であると言える。地元の老人が子供のころには溝は無かったと言い、埋没時期は近世ごろか。

1SD20は調査区の西側に位置するが、下層にあたる1SD25が興味深い。調査区の西端で南方向へ直角に屈曲する。施設の西端部にあたる可能性がある。

最後に遺物であるが、遺構の主体をなす時期の遺物ではないものの、10-7に注意したい。扁平打製石斧であるが、刃部が撥型に開く特徴を有する。通常の扁平打製石斧は短冊形が一般的であるが、韓半島の東部地域を中心に撥型の打製石斧がある。ここで韓半島東部との関連を論じる気はないが、短冊形以外の扁平打製石斧も存在することに注意したい。

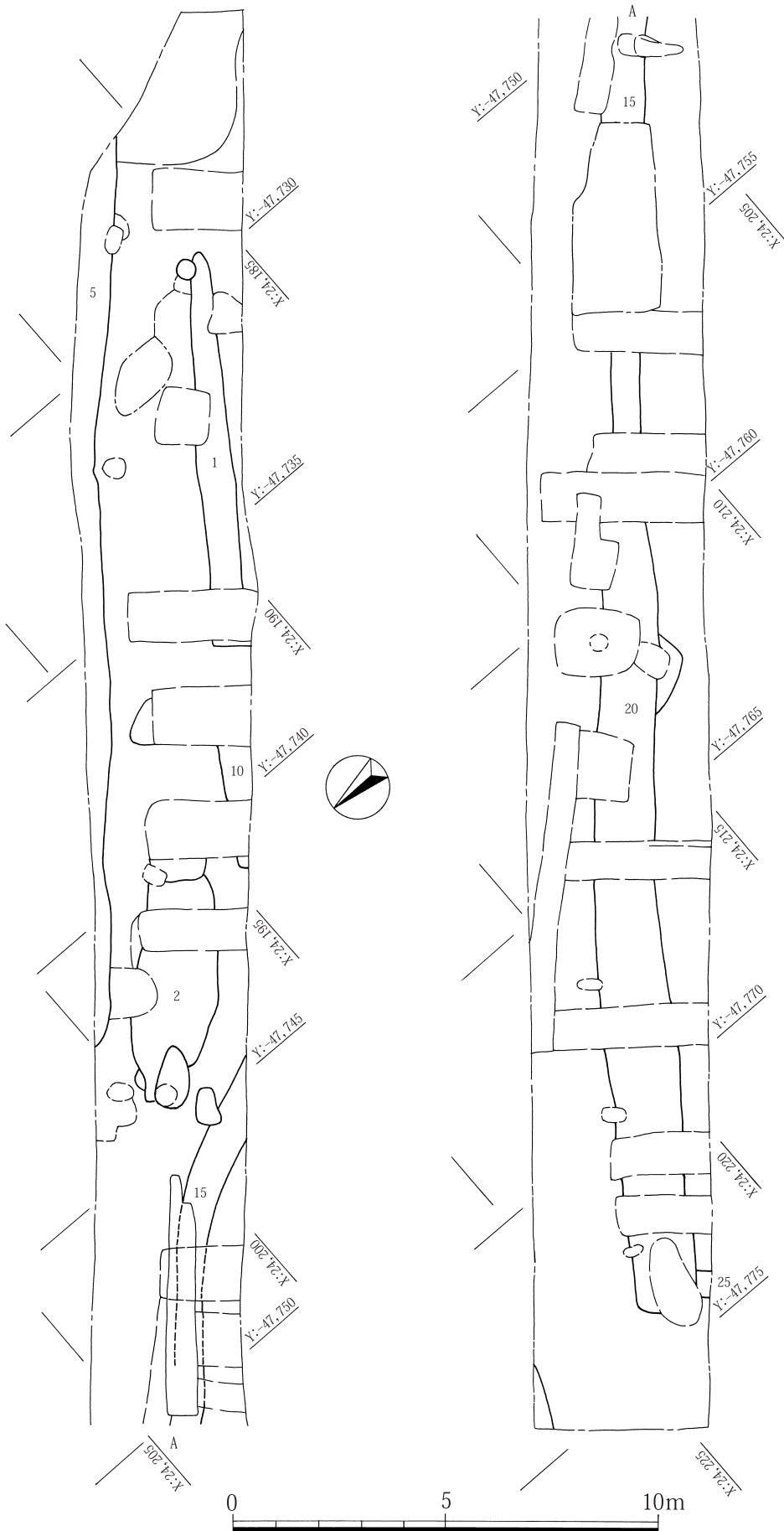


Fig.13 調査区略図 (1/150)

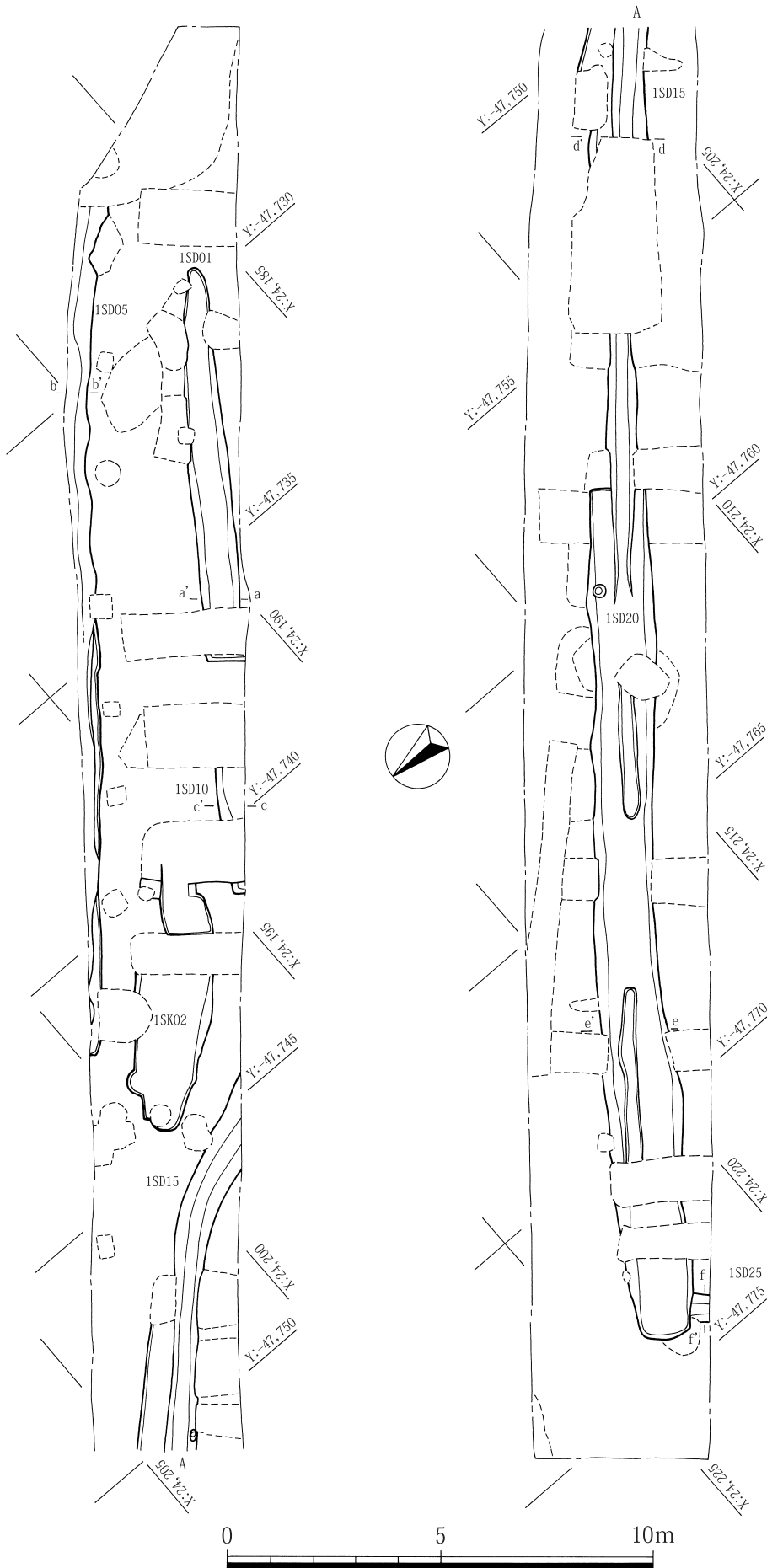


Fig.14 遺構全体配置図 (1/150)



## 2. 富重北屋敷遺跡（第1次調査）

富重北屋敷遺跡（第1次調査）は市道若菜北原高江南平線改良工事（拡幅）に伴って、記録保存の措置を講じたものである。調査区は、道路改良に伴う発掘調査の例に漏れず矮小な設定を余儀なくされた。

試掘調査で遺構が検出された際は、南東約200mで富重東原遺跡の本調査を行っていたため、そちらの調査の完了を待って本案件の本調査に着手した。

調査対象面積は、約175㎡で、調査は永見が担当した。

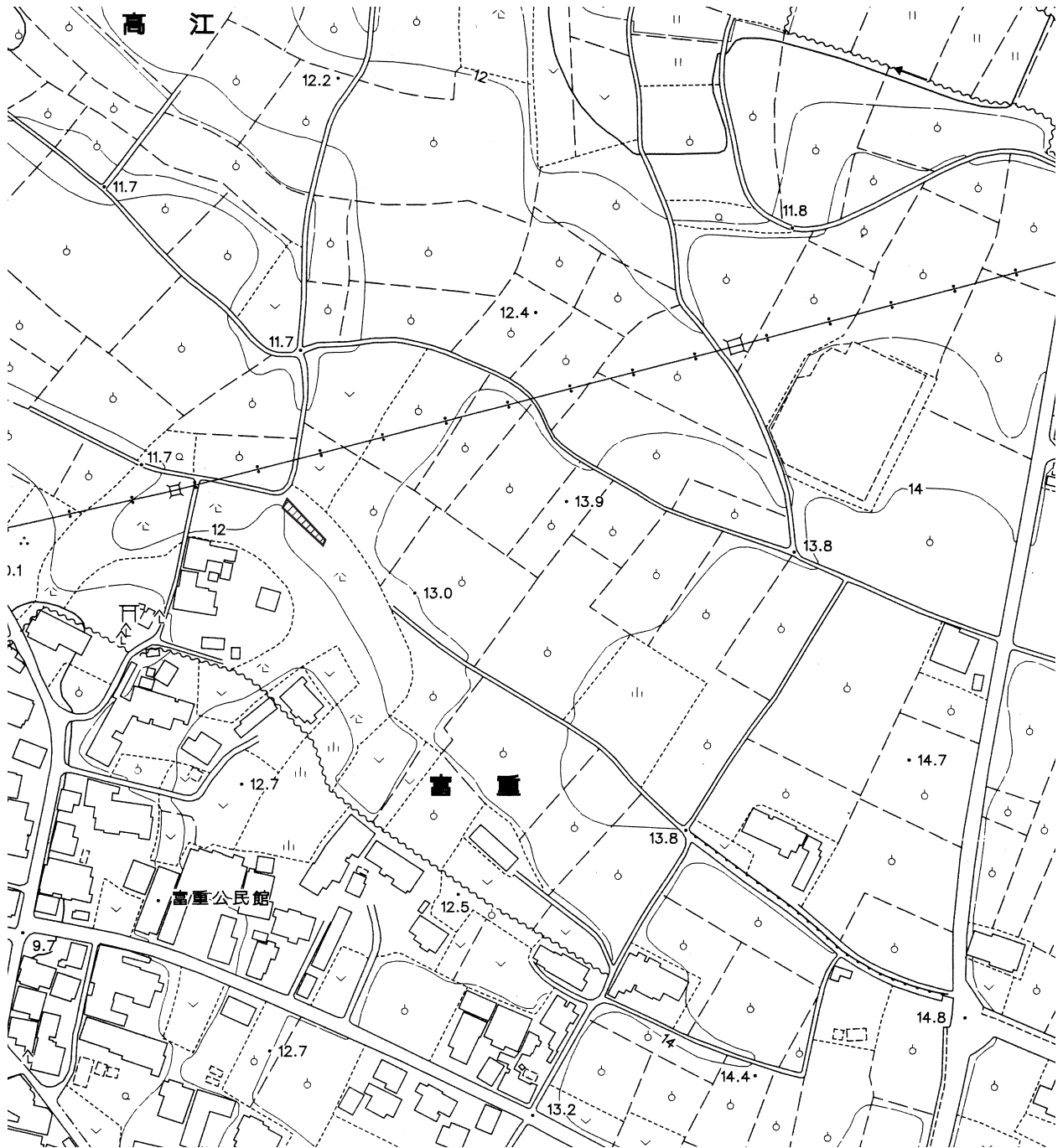


Fig.15 調査区位置図（1/2,500）

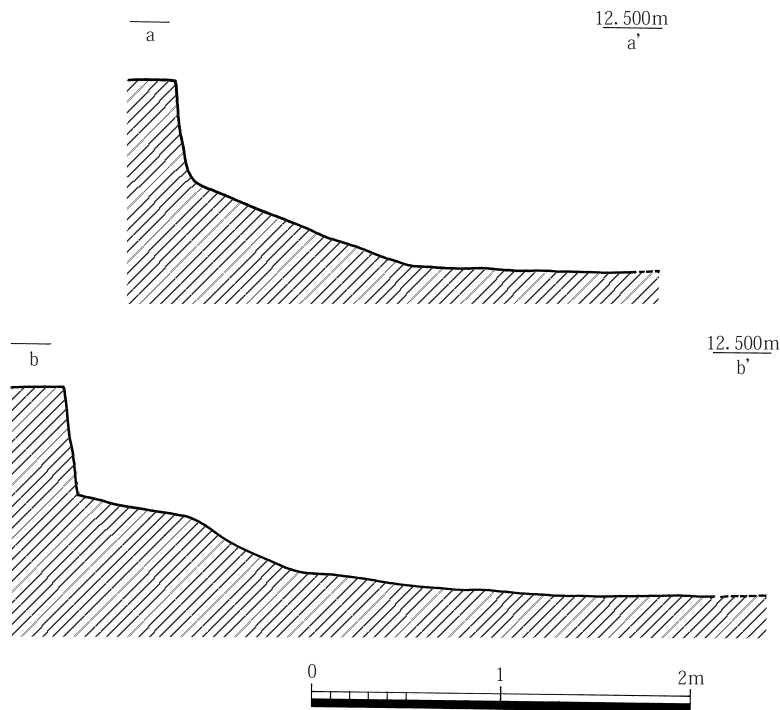


Fig.16 1SX01 実測図 (1/40)

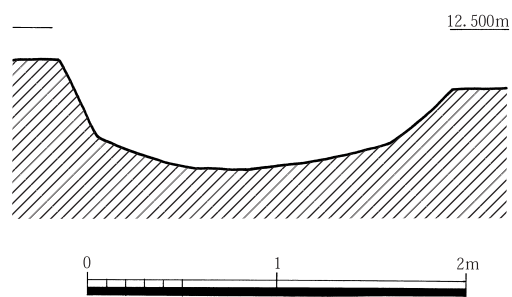


Fig.17 1SD02 実測図 (1/40)

1SD02 (Fig.17、Pla.7)

調査区の南側に位置し、1SX01に切られている。調査区内で4.7m残存しているが、双方向に延長するものと思われる。主軸の方位はN-83°-Eである。断面形状は概ね逆台形を呈するが、底面は平坦ではなく、中央部分が低くなっていて緩やかなレンズ状となっている。

1SD03 (Fig.18、Pla.7)

調査区の南側に位置し、1SX01と接続している。同時に存在していたと考えられる。調査区内で1.8m残存しているが、南方向に延長するものと思われる。主軸の方位はN-35°-Eである。断面形状は深い逆台形を呈し、底面は平坦である。

出土遺物

全体でパソコンテナー1箱の遺物を確認した。掘削した土量に対して、非常に少ない出土量であるといえる。以下、遺構毎に報告する。

遺構

溜井と溝を検出した。

溜井（水源地遺構）

1基を確認したが、調査区のお大半をこの1基で占有する状況であった。

1SX01 (Fig.16、Pla.6)

調査区の北側を中心に、調査区のお大半を占める。北西側に広がるため平面規模は不明であるが、深さは1.0mを測る。平面形状は、今回の調査では2辺のみしか知りえることができないが、おそらくは方形もしくは長方形の形態が予想される。

断面形状は、逆台形を呈し、底面は湧水面まで達したところで平坦面を形成する。法面は本来一定の傾斜であったと思われるが、

法面の上位に段がある。本遺構の詳細については、小結で触れるので、ここでは割愛したい。

溝状遺構

2条を確認した。うち1条は1SX01と接続する。以下、遺構毎に報告したい。

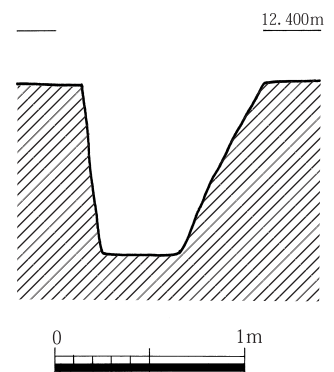
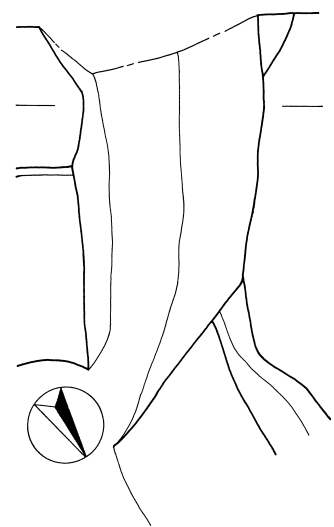


Fig.18 1SD03 実測図 (1/40)

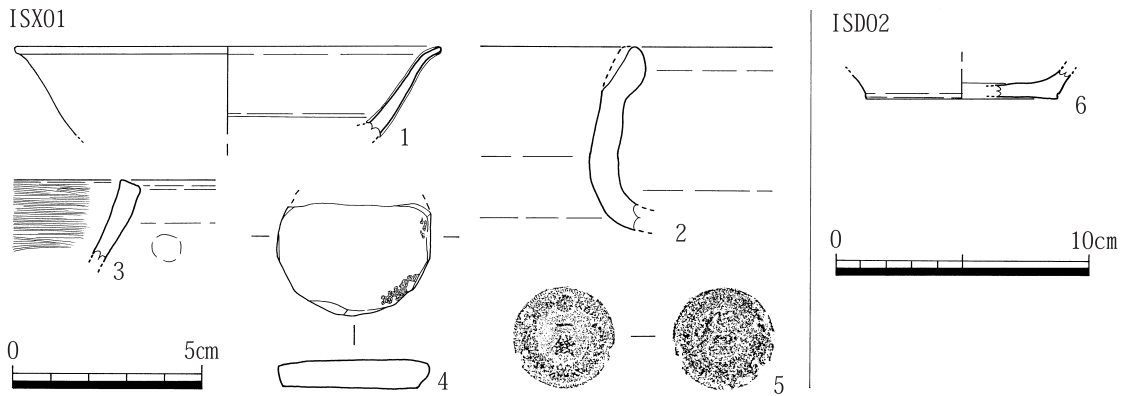


Fig.19 出土遺物実測図（1/3・1/2）

1SX01 出土遺物（Fig.19・Pla.8）

1は、青磁の碗である。竜泉窯系であろう。2は、陶器の壺である。口縁部は玉縁状となっている。3は、土師器の鉢である。内面は丁寧な篋磨きを施すが、外面には指頭圧痕が残る。4は、面子であろう。土師器甕の転用品と思しきものである。5は、一銭貨である。

1SD02 出土遺物（Fig.19・Pla.8）

6は、土師器の坏である。外底面には回転糸切の痕跡が残っている。

小結

遺構と遺物について、若干の考察を加えて小結としたい。

溜井（水源地遺構）と溝

今回検出した1SX01は、①底面が湧水面で平坦をなしていること②法面に段が帯状に形成されていること③溝（1SD03）が接続していること、から溜井（水源地遺構）であると考えた。①はその最も主要な要素であるが、②は満水時水面付近の法面が侵食されて段を形成したものと理解している。また③は導水用の水路と考えられ、その延長方向には現在の富重集落がある。

可能性としては、集落の生活用水を供給する水源地であったことを指摘できる。水田用の農業水利であれば、もう少し標高の低い場所に設営されるべきで、この位置では導水用水路の延長が長すぎるきらいがある。

一銭貨

1SX01から出土した19-5は、その表面に「一銭」とあることから一銭貨であることが知れる。表面の意匠から、竜一銭と呼ばれるものであることは間違いなく、初鑄は明治6（1873）年である。裏面の竜の鱗の形状で2期に大別されるが、この資料は四角形の鱗で、明治10（1877）年までに鑄造されたものである。1SX01の埋没時期に一定の示唆を与えられよう。

Fig. No.	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外部	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	備考	R-No.
17	1	1SX01	青磁	碗	16.6			口縁部 1/8	施軸	施軸	施軸			素地：淡茶白色 釉薬：淡灰緑色	精良	黒色粒子少	良好	外反		4
17	2	1SX01	陶器	壺				口縁部 細片	横ナデ 自然釉					素地：茶褐色 釉薬：暗緑色	蜜	黒褐色粒子少	やや良	玉縁状		2
17	3	1SX01	土師	鉢				口縁部 細片	横ナデ	横ナデ 不明	刷毛			外：暗茶褐色 内：淡橙茶色	やや蜜	2mm大の白色砂粒・石英・雲母	やや良	肥厚 端部に面		3
17	6	1SD02	土師	坏	7.6			底部 1/4		不明	横ナデ	ナデ	回転糸切	淡橙茶色	蜜	2mm大の白色砂粒・石英	やや良			1

Tab.3 出土遺物観察表（土器）

Fig. No.	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	R-No.
17	4	1SX01	土師		面子	4.0	2.9	0.8	11.2	4/5		1
17	5	1SX01	銅		一銭貨	2.8	2.8	0.2	5.0	完形		5

Tab.4 出土遺物観察表（土器以外）

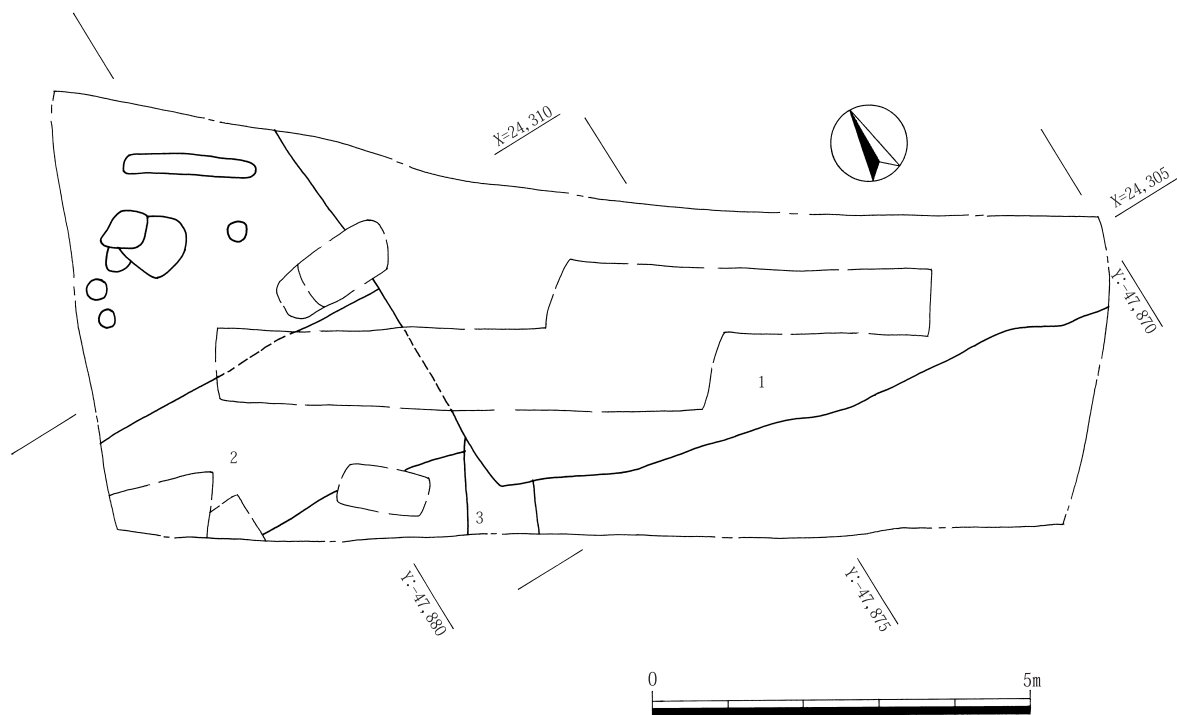


Fig.20 調査区略図 (1/100)

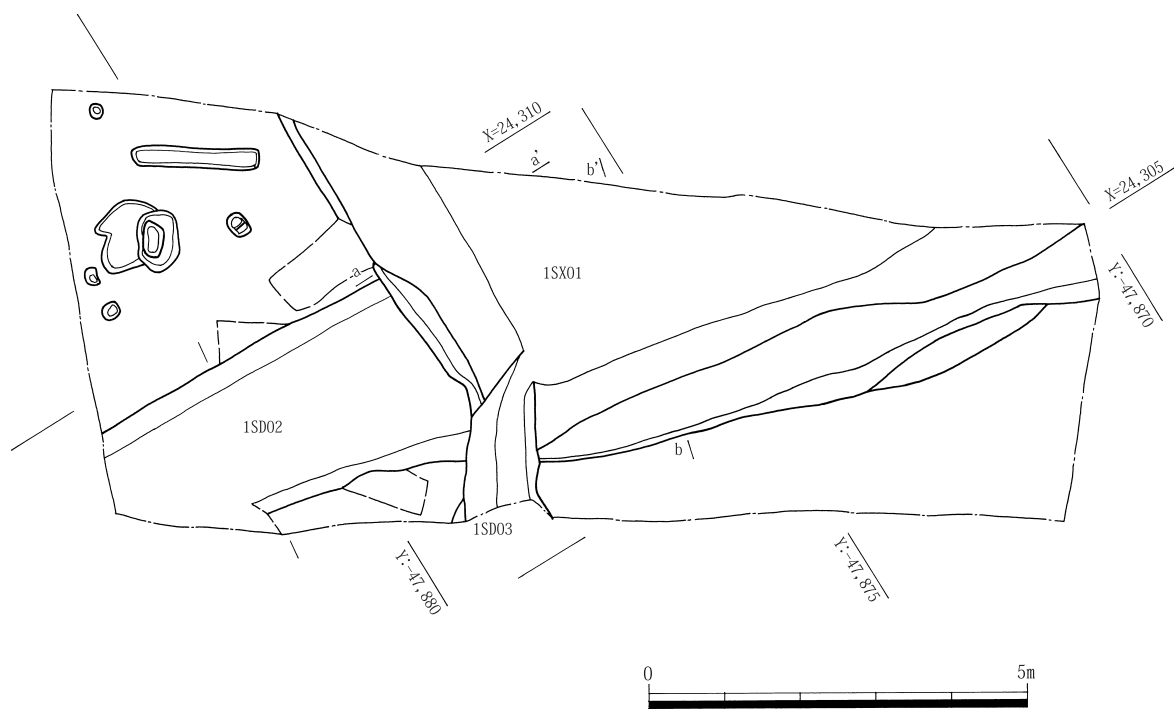
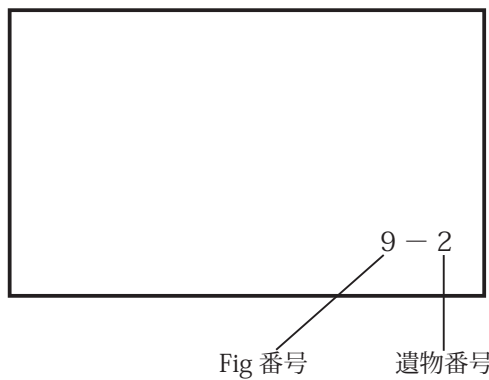


Fig.21 遺構全体配置図 (1/100)

# PLATE 写真図版

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりとなっている





東調査区全景（東から）



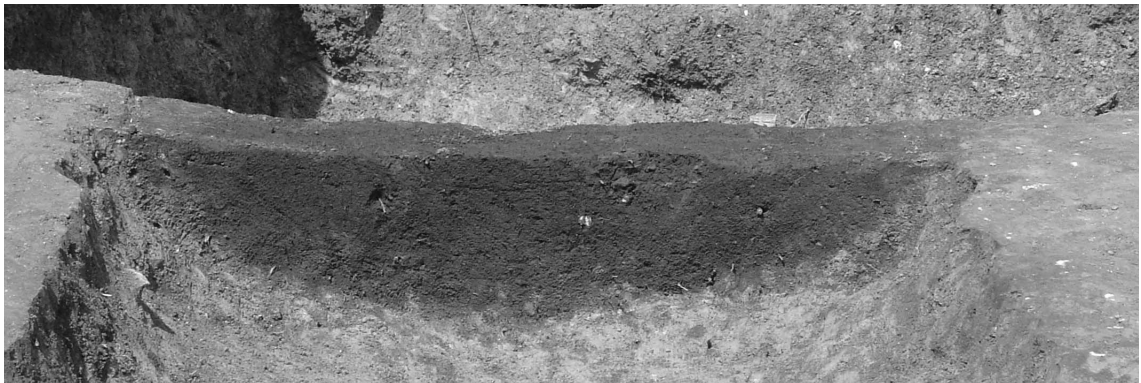
東調査区全景（上が北）



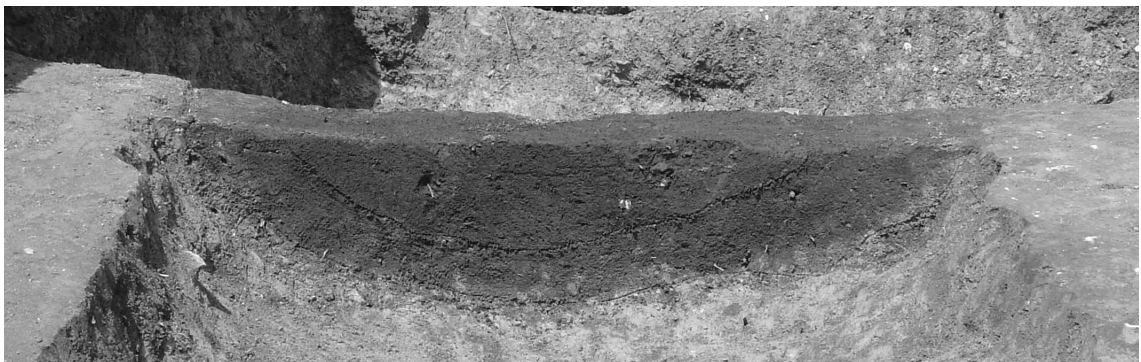
西調査区全景（西から）



西半調査区全景（上が北）



1SD01 土層断面（分層前・東から）



1SD01 土層断面（分層前・東から）



1SD01・1SD05 完掘状況（東から）





1SD15 土層断面・調査区基本層序（東から）



1SD15 完掘状況（東から）



1SD20 土層断面（西から）



1SD20 完掘状況（東から）



調査区全景（東から）



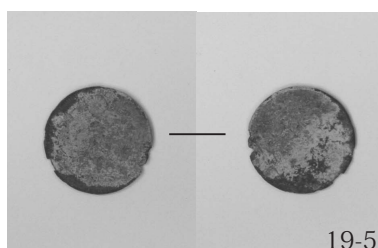
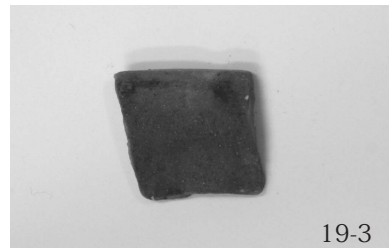
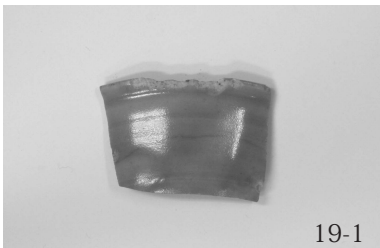
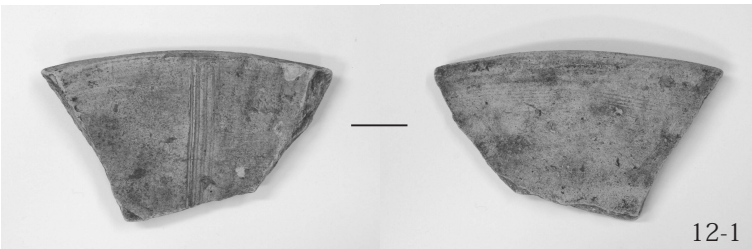
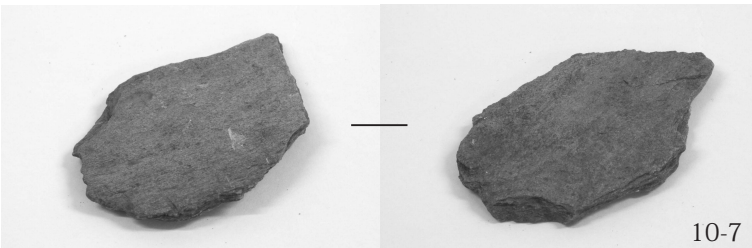
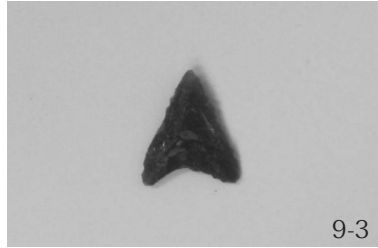
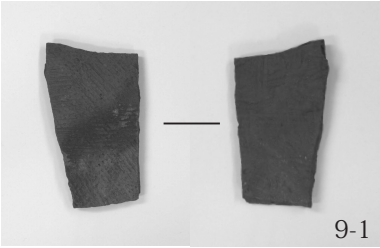
1SD02 完掘状況（東から）



1SD03 完掘状況（北から）



1SX01 満水時状況



# 筑後市内遺跡群Ⅹ

福岡県筑後市大字富重所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書  
第79集

平成19年3月31日 発行

発行 筑後市教育委員会  
福岡県筑後市大字山ノ井 898

印刷 大同印刷株式会社  
佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

